

戦後日本における3つの自己

片 桐 雅 隆

【略歴・所属】

東京都立大学大学院社会科学研究所博士課程社会学専攻 単位取得退学
博士（文学）早稲田大学
現在、立正大学文学部教授・千葉大学名誉教授

【専門】

社会学理論、自己論、現代社会論

【主著】

『自己の発見』世界思想社、2011（単著）
『認知社会学の構想』世界思想社、2006（単著）
『過去と記憶の社会学』世界思想社、2003（単著）

今日の話のタイトルは「戦後日本における3つの自己」です。戦後日本といっても、もう70年位たつわけですが、その間に時代がどういふふうに変化して、それぞれの時代にどういふ自己が語られてきたのかという話をします。まず、ここでは戦後の時代を4つに分けています。

1. 戦後日本における4つの時期区分と3つの自己

4つの時代の1番目は「理想の時代」です。厳密にはなかなか何年からということではないのですが、敗戦から60年か70年位までの時代が「理想の時代」に当たります。この、4つの時代の1期から3期までは見田宗介さんの分類を参考にしています。理想の時代は、たとえば、戦前の社会はとても封建的な社会で、戦後の社会は民主主義的な社会だとか、資本主義に代わる社会主義という理想的な社会があるのだとか、そういった理想が語られた時代で、それが理想の時代です。その時代に対応する自己像が「近代的個人」です。

2番目の時代が「夢の時代」です。これは、いわゆる高度経済成長期に

当たります。それが60年前後あたりから70年代までの時代です。これも厳密にいつからいつまでに関してはいろいろな説があります。その時代に対応する自己像が「私化(しか)する自己①」です。これは、私化(わたくしか)とか、私事化(しじか)、私秘化(しひか)とかとかいろいろな表現がありますが、ここでは「私化する自己」と表現しておきます。

次の時代が「虚構の時代」です。これはいわゆるバブル経済の時代に当たります。80年代です。バブル経済、あるいは消費の高度化した時代です。この時代に対応する自己像が「私化する自己②」です。

その次の時代は、これは見田さんの区分にはないのですが、「断片化する時代」です。これはグローバル化とかネオリベリズムといった社会の仕組み、あるいは体制が浸透していく時代です。この時代には、日本の社会にあっても、たとえば無縁社会とか、格差社会とか、そういう言葉で社会が表現されるようになりました。断片化は、リキッド・モダニティを描いた、バウマンという社会学者の言葉です。その時代に対応する自己像が心理化する自己です。これも心理主義化とか心理学化とかいろいろな表現がありますが、「心理化」と表現しておきます。

このように戦後の社会を4つの時代に分けて、それぞれに対応する自己像として「個人」、「私化する自己①、②」、「心理化する自己」という3つの自己が、「私化する自己」は2つに分けていますが、今日のタイトルにあるような「戦後日本における3つの自己」です。

2. 「理想の時代」

それぞれの時代について具体的なイメージがなかなか持ちづらいと思いますので、はじめに時代のイメージを持ってもらってから、それぞれの時代がどういう時代だったのかという話をします。

まず理想の時代です。トランプさんが大統領になって日米の安全保障条約がどうなるのかというような不安定な時代になりましたが、皆さんは、教科書等で国会議事堂をとりまくデモ隊の写真を見たことがあるかもしれません。国会の車寄せのところまで、大勢のデモ隊が押しかけているという写真です。私はこのとき小学校6年生でした。1960年です。東京で生まれて育ったので、そのときは東京にいました。安保条約とか、詳しくはもちろん小学生ですから分かりませんが、社会が大きく揺れているというイメージだけは今でもとても強く残っています。ちょうど、私の小学校

は古い小学校だったので、国会議事堂の車寄せのようなところがあって、そこでデモ隊と機動隊に分かれて押し合って、という遊びをしていました。子供の遊びの中にも時代の雰囲気がとても反映していた時代なのです。東京を含めて、日本の社会すべてそういう雰囲気だったかどうかというのは微妙ですが、私の場合には子供のときから、社会が揺れているのだという緊迫感というか緊張感というか、そういうものを感じていました。

これは必ずしも理想の時代には当たらないかもしれませんが、70年前後に日本でも大学紛争(闘争)がありました、私は、68年から72年までの4年間が大学生だったのですが、やはりこの頃も社会がとても大きく変わっていくという、そういう雰囲気があった時代でした。

50年代、特に後半だと思いますが、テレビは当時、白黒テレビですが、値段が10万円位していました。当時の大卒の初任給は1万円台です。10万円は、今の値段に換算すると100万円は下りません。テレビが1台100万円です。今では、安いテレビだったら3、4万円位からありますし、4Kとかでもせいぜい30万円か40万円位で買えます。100万円という値段はとても高い値段でした。だからテレビは各家にはなくて、駅前にテレビが置いてあって、それをみんなで見に行くわけです。今で言うところのパブリック・ビューイングです。私は高円寺で育ったのですが、高円寺の駅前に家族でテレビを見に行った記憶があります。

この時代は、デモとか、政治的なことにかかわらず、大勢の人が、外に出ていろいろなことを経験するという時代でした。今は、もうテレビも見ないかもしれませんが、見るとしても1人で見るような時代になっています。しかし、この時代は、社会の出来事が個人化(私化、心理化)してなくて、社会の大きなうねりの中でいろいろな出来事が起こったという、そういう時代ではなかったかと思えます。

この時代の自己像として(近代的)個人という言葉がよく語られました。個人とは何かについては、ギデンズのモダニティ論をとおして説明します。ギデンズはモダニティ、つまり、近代社会の特徴として大きく2つ挙げています。1つは時間と空間の分離、もう一つは脱埋め込みです。これはディス・エンベディング(dis-embedding)という言葉の訳で、はじめに翻訳した人が「脱埋め込み」と訳したのでこれが定着したのですが、私は「離床化」と訳しています。

時間と空間の分離は、簡単に言えば、同じ場所に居合わせない多くの

人々と同一の社会をつくることを可能とした現象です。たとえば、今はインターネットがあって、世界中の人と同時にやり取りができます。私のはじめてアメリカに行ったのは86年、今から約30年前です。このときは、国際電話がありましたけど、郵便で、つまり手紙でやり取りしていました。そうすると、行って返ってきて2週間かかります。日本を出して、アメリカで着くのに1週間かかり、戻ってきて1週間。合わせて2週間かかりました。今はネットで瞬時に、アメリカと日本だけでなく、アメリカと中国とか日本とオーストラリアとか、複数の国の人たちと同時に、そして瞬時にコミュニケーションできるわけです。かつては、遠いところに行くためには、あるいは遠い人とコミュニケーションするには時間がかかっていたわけですが、今はもうそういうことが関係なくなってきています。このことは、やはり社会を大きく変えました。IT技術の発達は、スマホを作っただけではなく、社会の仕組み自体を大きく変えていった大きな出来事、大きな革新だと思えます。

もう一つは、脱埋め込みです。これはさっきも言いましたように、ディス・エンベディングの訳です。エンベディングはベッドに入ることです。ベッドは苗床という意味があって、いろいろな物事が生まれる土台のようなものです。もともとパーソンズという社会学者が「苗床社会」という言い方をしました。社会学でベッドというのは単に寝るだけではなくて、いろいろなものが育つ温床みたいなものをイメージします。ディスというのは、そういうものから出ていくこと。つまり、ベッドに入るのではなくそれから出ていくという意味です。だから、離床化の「床」は単に寝床ではなく、社会の基礎となる共同体のようなものです。私は、離床化という言葉を使っていますが、全然普及していません。しかし、離床化という訳は、dis-embedding の意味の核心を表すものだと思っています。

離床化は、シンボリックな通標（貨幣）と専門知識の普及とに関連しています。医学の知識に関して言えば、たとえば日本でがんの治療をする、その知識はアメリカで通用しないということはありません。近代の（西洋）医学はどこ地域でも通用するわけです。貨幣もそうです。もちろん貨幣は国によって違いますが、日本の国内では円という共通の通貨が使われていますし、海外に出れば交換して使うことができます。だから貨幣にしても専門的な知識にしても、その地域、つまりローカルな地域で通用するだけではなく、ローカルな地域を超えたもっと普遍的な単位で使われるわけ

です。このように、ディス・エンベディングは、ローカルな文化を超えて、社会がもっと普遍的な単位で形成されるようになることを意味します。近代社会は、そういうローカルな、特定な地域だとか、職業だとか、身分だとか、あるいは家柄だとか、そういうローカルな原理で成り立つのではなく、それらを超えたもっと普遍的な原理で成り立つ社会を、すくなくとも理念的には意味しています。

皆さんも、高校位までは、友人は、自分がどの地域で育ったかとか、家族同士が知り合いであるとか、そういうローカルな基準でできることが多いと思います。しかし、大学に入ると自分がどこの出身だとかはあまり関係なくなって、同じ大学生として友達ができますよね。それは、まさに個人化と同じことです。近代社会も、ローカルな単位で物事が進むのではなく、それを超えた単位で社会が成り立っている社会なのです。

普遍的な社会の一員としての個人とは、そういうものです。個人主義に対して利己主義的なイメージを持っている人が多いかもしれませんが、決してそういうものではありません。個別的な単位で物事を考えたり行動したりするのではなく、それを超えたもっと普遍的な単位、それが国家という単位のこともあれば、国家を超えた人類社会のような場合もありますが、そういう単位でものを考えたり行動したりする人、それが個人なのです。

理想の時代には、そういう個人が、理想的で望ましい人間であり、自己のあり方だということがいろいろなところで言われました。その一つの典型的な議論をした人に田中義久さんという社会学者がいます。田中さんは当時の人間像のあり方として4つのタイプを考えました。1つは、今言った個人です。あるいは市民という言い方もしますが、次が大衆です。それから次が私民(しみん)です。4番目が庶民です。この時代は、日本が戦前の社会から新しい社会を築くことで、伝統的な考え方を断ち切って、民主主義だとか、個人に基づく新しい社会の仕組みを作ろうという機運がとても強くあった時代です。

この4つの類型からいくと、最後に出ている庶民は、「伝統的な慣習に関心を持つ」人間のタイプで、自分の育った個別的な地域だとか家柄だとか身分だとか、そういう伝統的な慣習に基づいて考えたり行動したりするタイプの人間です。それに対して、戦後、新しい社会になって新しい人間が出てきた、新しい自己が生まれてきたという議論をいろいろな人が当時

行ったわけです。4つの人間のタイプで一番はじめの個人は、社会的な関心を持って常に自己反省的、つまり、自分の生き方はこれでいいのだろうか、自分の行動はこれでいいのだろうか、ということを中心に反省する、そういう自己反省的な人間のタイプです。社会的な関心を持って自己反省的な人間のタイプとして個人が一番望ましい自己像だということがよく言われたわけです。大衆とか私民は、ある程度社会が豊かになって、自分の生活、自分の生き方もある程度確立する中で、社会的な関心よりも自己の欲望充足を重要とした人間のタイプです。その中で、自己の豊かな生活を求める一方で、あまり社会的な関心をもたないタイプが大衆です。一方、私民も大衆と似ているのですが、自分の欲望に忠実であるということが、逆に社会的な伝統や拘束を拒否するような批判的な精神を持っている人間のタイプを意味します。

田中さんは、この4つのタイプの中で個人が一番望ましいということを使った。それは、国のいろいろな政治的な出来事に関心を持って、反対であればデモに行ったりするような人間です。

日本でも去年、安保法制の問題があって、SEALDsという学生さんたちのグループがニュースになりましたが、私も安保法制が国会で審議されているときに3~4回、国会前に行きました。しかし、そういう学生さんがたくさんいるのかなと思って周りを見ましたがほとんどいなくて、ほとんどは私と同じ世代の人でした。マスコミでは、いかにも若い人がデモにたくさん行っているように報道されていますが、「ああ、やはり昔と全然変わっていないな」とつくづく思いました。以上が、理想の時代と、それに対応する個人についての話です。

3. 「夢の時代」

次の時代は、夢の時代です。60年あたりから70年代半ば位にかけての時代です。これはいわゆる高度経済成長期に当たります。50年代後半、高度経済成長期の始まりかその前位ですが、この時代に、三種の神器といって、洗濯機、冷蔵庫、それから白黒テレビをもつことが多くの人のあこがれでした。これらの電化製品は、昔からあったわけではなく、日本だと60年代、たかだか50年位前から普及してきたものです。

私は86年に、はじめてアメリカで1年間位生活をしましたが、そのときアパートで備え付けの冷蔵庫を見て大変驚きました。全然作りが違う

のです。日本のその当時の冷蔵庫は本当にちゃちで、ペラペラの鉄板だったのですが、アメリカの場合には、もう戦前から冷蔵庫が普及していたこともあって、鉄板はとても頑丈で、全然つくりが違うという印象を持ちました。

こういう電化製品が普及しているのは、皆さんは当たり前だと思っているかもしれませんが、日本ではまだそれ程長い歴史があるわけではありません。三種の神器の次には、3Cと言われたクーラー、カラーテレビ、カーという、三種の神器より高度な耐久消費財を持つことが理想とされていきました。それが夢の時代です。

この時代は、三種の神器とか3Cに示されるように、社会がものの面で豊かになっていく一方で、公害が社会問題となりました。今は公害という言葉があまり使われなくなって、環境問題という言葉が使われるようになりましたが。三重県の日守市とか、首都圏での川崎での喘息など、前者を含めた4大公害病に象徴されるように、さまざまな公害が多発して、社会が豊かになる反面でいろいろな社会的な問題が起きました。

それは中国でも同じです。中国の大気汚染が今、非常に問題になっています。千葉大で教員をしていた頃に知り合った中国からの留学生に私の学生時代の公害の話をしたとき、「ああ、日本でもやはり公害でいろいろ問題だったんですね。中国と同じですね」と言われたことがありました。だから中国を見て、「遅れている」と思うかもしれませんが、日本もほんのちょっと前はそういう社会だったのです。

こういう時代を、社会学では「大衆社会」という言葉で表現します。日本の大衆社会は3つの時期に分けることができます。大衆社会の第1期、これが1950年代です。田中さんの類型で大衆とか私民という言葉がありました。その言葉はこの時代に対応します。

大衆社会論には、一方では、ファシズムの研究をした主にドイツの大衆社会論と、一方では、戦後の豊かなアメリカの社会を対象としたミルズの『ホワイト・カラー』とか、リースマンの『孤独な群衆』などの研究があります。後者の2つは、1951年とか1950年に書かれたものです。それらのアメリカの大衆社会論は、社会が豊かになって、人々の関心がものを生産することや働くことから、ものを買ったり、どこかテーマパークへ行ったり旅行したりという、そういう広い意味での消費が社会の中に浸透していく時代を背景としています。アメリカの大衆社会論は、そういう

新しい時代の中で、社会と人間のあり方がどう変わっていくのかを描いたものなのです。

日本にもアメリカの社会学がすぐに入ってくるわけです。日本の研究者、日本の社会学者もそういうものを取り入れて、盛んにこの時代に、大衆社会論が論じられました。しかし、まだこの頃は、日本が十分な大衆社会段階に入ってなかった時代でした。それは2つの理由があって、1つは、都市と農村との二重構造です。つまり都市では消費が人々に浸透してくるわけですが、農村とか地方はそういうような状況ではなかったのです。この頃、まだ第一次産業で働いていた人口は5割から6割位を占めていました。

3～4年前、ある農家の人にインタビューをして、ライフヒストリーを聞いたことがありました。その方が、テレビと耕運機が農村を大きく変えたと言っていたことをとても印象的に覚えています。つまり、それ以前には、都市と農村は全然社会が違っていたと言うのです。ところが、農村にいてもテレビを見て都市の生活を知ることができ、耕運機が入ることで人手が省け、自由な時間(余暇)が持てるようになったわけです。だから、農村にいても都市的な生活ができるようになった、ということを語っていました。逆に言えば、それ以前の時代は、まだ都市と農村は全然違う社会だったわけです。

それに対して、大衆社会の第2期が、高度経済成長期です。この時代に、アメリカで論じられたような大衆社会が日本の社会にも進展してきたのだということが言われるようになりました。その当時、「新中間大衆」という言葉がよく使われました。その前の時代もさっき言ったように、日本にも大衆社会があるのではないかという議論があったわけですが、まだそうではなかったという結論に至ったわけです。それに対して、新しい大衆が生まれてきたのだというのが、「新」という言葉のついた、新中間大衆という用語が使われた理由です。

新中間大衆は、電化製品や、マイホームや、マイカーを持ち、学歴も高度化した人達です。たとえば、冷蔵庫や洗濯機やテレビは、1970年位に8割程度の家庭に普及しましたが、その普及率が80年になるとほぼ100%近くになるわけです。

それから車は、60年のときにはほとんど普及していなかったわけですが、これも80年位になると6割位の家庭に普及してくるわけです。今は

車2台の時代と言われますが、車も決して昔からあったわけではなく、やはり70年位から徐々に一般家庭に浸透していったのです。

それから持ち家の率そのものは当時と今とは大きくは変わっていないのですが、持ち家の数そのものは、やはりこの高度経済成長期に倍増していきました。住む家に関しては、借りるほうがいいと思う人も多いので、必ずしも全ての人が持ち家志向になるとは限りませんが、持ち家の戸数は、60年から80年位にかけて倍増しました。

次に学歴の高度化に関してですが、今の日本社会では5割以上の人が4年制の大学に行きますが、これも60年頃には、10%位でした。私の学生時代は68年から72年までですが、70年でも進学率は2割程度でした。だから私が大学生の頃には、大学に行くのはむしろ例外的だったのです。ですが、大学生の数は今とあまり変わらないのです。私の世代はいわゆるベビーブームの世代で、今の世代の倍以上います。皆さんの世代は110万人位だと思いますが、私の世代は240万とか250万とかの人口があります。だから進学率は2割程度だったのですが、大学生の数は皆さんとそう変わらなかったのです。だから大学に入ることが大変だった時代でした。

今では、多くの人が大学まで行けるようになり、大学に進学するのが当たり前になりました。今は、専門学校とかを含めると、同世代の7割位の人が高校を出てからさらに学校に行っているわけです。韓国では今、大学生の数が同年代の人口の7割とか8割とか言われています。専門学校生を含めると、日本も大して変わりません。ただ、韓国ではどこの大学を出たかによって初任給が違うという話ですから、その意味では競争がとても激しいと言えます。

電化製品や持ち家やマイカーが普及し、学歴が高度化して、新しいミドルクラスが登場してくる。今では貧困とか格差が議論の対象にされて、当時、一億総中流化と言われたのが幻想なのだという議論が、貧困研究の中で出てきています。しかし、この時代は、たとえ幻想ではあっても、多くの人が「中流社会になったのだ」と思った時代なのです。

そういう時代に社会や自己を描いた議論はたくさんありますが、その中で山崎正和さんの「硬い個人主義から柔らかい個人主義へ」という時代の移行を示したネーミングが当時とても注目されました。

硬い個人主義は、禁欲的な労働だとか奢侈(しゃし)の否定、将来の目

標に向かった自己の一貫性などによって特徴付けられます。つまり、あまり生活に余裕がなくて働くだけが自分の人生だという時代の個人主義です。贅沢をしてはいけないとか、将来に向かって目標を持って禁欲的に生きるという、まさにヴェーバーのプロテスタンティズムの倫理が、この硬い個人主義に対応します。それに対して、柔らかい個人主義は、社会が豊かになって、労働時間が減り、家電が入ってきて家事労働時間が減っていく時代の産物です。働くだけで人生が終わるとか、家事や子育てだけで人生が終わるのではなく、それ以外の余暇ができてきて、その中で消費や社交が人生の中で重要視されていくようになる。したがって、1人1人が自分自身のライフスタイルを選択できるようになっていく。それらが柔らかい個人主義の特徴です。

そういう時代に、社会が私化する。プラバタイゼーション (privatization) が私化という言葉の英語ですけれども、その時代に、私化という言葉が社会学で使われるようになりました。大衆社会という言葉もありますが、それとダブった形で「私化社会」とか「私化する自己」というような言い方がされたわけです。

その議論をした典型的な社会学者に、P.バーガーというアメリカの、この人はドイツから戦争中にアメリカに亡命して、戦後ずっとアメリカの大学にいた人ですけれども、社会学者がいます。彼は、現代社会が公的な領域と私的な領域に区分され、また、公的な領域が産業領域(会社とか働く場)と官僚制(国家とか地方の官僚制)の世界に区分されると考えました。私化する自己とは、公的な領域が自らの生にとって意味あるものとして感じられなくなったこと、それに呼応して、私的な領域に生きる意味やアイデンティティの根拠を求めるようになったことに由来します。バーガーは、公的な領域は、意味あるもの、アイデンティティの根拠として人々の経験の世界から消失したと言っています。

ただし、その現象は、公的領域がなくなったことを意味するものではありません。それはあくまで自己意識の面で、多くの人々にとって意味ある領域として公的な領域が希薄化してきたことを意味しています。つまり私化は、働くことだとか、国家のために、たとえば戦争で死ぬとか、そういうふうな公的な領域のために人生を捧げるのではなく、自分自身の私的な領域、家族だとか友達だとか、あるいは自分自身だとか、そういった私的な領域に生きる意味を求めていく、そういう傾向が私化なのです。だから

決して国がなくなったとか、働く場がなくなったということではなくて、あくまで、自己意識やアイデンティティが変化してきたことなのです。

そして、公的な領域の無意味化が、バーガーにとって決してネガティブに捉えられていたわけではないことに注目することも必要です。つまり、田中さんの類型の中では、大衆とか私民はそれほどポジティブではなく、やはり個人という、社会に参加して自己反省的な人間のタイプが望ましいのだ、自分の欲望に忠実だということは、ポジティブな面もあるがやはり個人に比べると望ましくないのだ、という位置付けがなされていました。しかし、バーガーは、豊かな生活をして、自分自身の欲望を満たすということをもっとポジティブに描いたわけです。先ほど、大衆社会の第2ラウンドと言いましたが、社会が大きく変わっていく中で、私化を非常にポジティブに描こうとしたわけです。

4. 「虚構の時代」

虚構の時代が、次の時代です。先ほどの区分では、理想の時代、夢の時代に次ぐ3番目の時代です。80年代は、バブル期とか日本でもよく言われました。バブル期は80年代で、90年代はじめにバブルが崩壊するわけです。土地の値段に関して言えば、80年代に入って急激に値段が上がって、そして、90年代はじめに暴落するわけです。

この虚構の時代を、大衆社会第3期と名付けています。それは、高度経済成長がさらに進展して、消費が高度化していく時代です。耐久消費財は、80年代にほぼ100%、100%ということはありませんが、100%に近い世帯に普及していきました。そうすると、今までは洗濯機がなかったから洗濯機を買うとか、冷蔵庫がなかったから買うという「機能的な消費」とは別の消費形態が生まれてきます。機能的な消費は、洗濯機が必要だから買う、冷蔵庫が必要だから買うという機能の消費を意味したわけですが、それらが飽和状態になると、機能だけでは売れなくなるわけです。洗濯機や冷蔵庫は今までは白物と言われてきましたが、今はご存じのようにいろいろな色があります。部屋のインテリアに合うような色が求められていくように、飽和状態になって消費が高度化していく。それが「記号的な消費」です。子供の頃文房具で、消しゴムもバナナのおいがするとか、イチゴのおいがするとか、それは消しゴムの機能に全く関係ないわけですが、そういうものでなければものが売れなくなるわけです。

車でもそうです。同時に、ものを買うということがアイデンティティの基盤になっていく。たとえばブランド品は典型的です。まだ皆さんは学生さんだから、高いバッグとか財布とか、グッチとかルイ・ヴィトンだとかを持たないかもしれませんが、当時は（おそらく今でも）、ブランド品を買うことで、自分が豊かになったような気持ちになる人が多かったわけです。

その時代によく語られた自己像として新人類とかオタクがあります。オタクと言う言葉は今でも残っていますが、当時とは少しニュアンスが違う言葉になっています。消費を通じたアイデンティティの探求や人間関係を構築していくというような自己像が新人類やオタクとして語られました。商品を通して同じようにアイデンティティや人間関係を築くという点では両者は同じ自己像ですが、オタクは新人類と比べると少しくローズドな、閉じられているという点で新人類と区別されています。

この時代は高度経済成長期のようにものを消費することが大きな意味を持ってきた時代なのですが、夢の時代との違いは、大きな物語の解体に伴うアイデンティティの不安定化とか不安化という点にあります。つまり高度経済成長期では、日本の社会が経済的に発展して豊かになるのだという大きな物語が持てたとか、あるいはその前の時代の、理想の時代の延長線で、社会主義が理想的なイメージとしてまだ少し残っていて、今の資本主義の社会はいろいろな矛盾があるが、それに対して、社会主義はまだ理想的な社会であり得るのだという物語が感じられた時代だったのです。ところが80年代はそういう大きな物語が幻想化してしまって、自分の生きる指針とかアイデンティティの手がかりが、消費するというにしか見つけられなくなっていきました。それが不安定化とか不安化ということです。夢の時代も虚構の時代も、それぞれの時代の自己の特徴を私化する自己と名前づけましたが、上記の点で虚構の時代の自己は夢の時代の自己と異なるので、虚構の時代の自己を「私化する自己②」として、夢の時代の自己を「私化する自己①」として区別しました。

5. 「断片化する時代」

その次の時代が断片化する時代です。これはグローバル化の時代になるわけです。たとえば、市場がグローバル化して、かつてどこかの地域が夜中であれば、その動きはほかの地域には関係なかったわけですが、今はも

う24時間化して世界が一つになってしまったわけです。

86年にアメリカに行ったときに、夜中にバスや市電が動いていて驚いたことがありました。市電の道路のすぐ際のアパートに住んでいたのですが、なぜ夜中に市電が走っているのかなと思って聞いてみると、飛行場が24時間開いているから、それに合わせてバスとか市電も動いているのだと言われました。アメリカは80年代のはじめから空港が24時間営業していたわけです。アメリカでは、交通に関してはその時代からグローバル化していたのです。

89年にベルリンの壁が崩壊し、その後多くの社会主義国家が解体して、資本主義とか社会主義というような図式が崩れていく。日本でもそれに合わせてグローバル化して、空間と時間が関係なくなっていく。それから、資本主義の市場に中国が入ってくることによって、社会が大きく変わっていくわけです。

携帯でガラパゴス携帯、ガラケーという言葉があります。日本社会も、今まで日本市場だけでもものを作って、それで何とかやっていたわけですが、グローバル化の中で、もうそれだけではやっていけなくなってきたわけです。だから、家電でも中国とか韓国の企業に負けて、経営悪化してきて、シャープとかサンヨーとかもうなくなっていますよね。

先日、高校の同窓会があって、クラスの出世頭で、ソニーの重役になった人がいるのですが、何年振りかで会って話をしていたら、「もうソニーは自分には関係ない」という冷たいことを言っていました。ソニーが崩れたらとてもショックですね。あと残るのはトヨタ位しかないという、そういう社会になっていくような気がします。

日本ではその時代の頃から、格差社会や無縁社会という言葉がよく使われるようになりました。元気な若者でも不安定な雇用の中で一度失業してしまうと、お金がなく食べるものがなくなって餓死するというようなことが、NHKで放映されるようになってくるわけです。今、シングルが増えていると言われていますが、それは経済的に結婚できない層が増えているからだと言われていています。20代後半から35～36歳までの年齢層で年収300万円以下の層は単身率が75%位です。しかし、400万円以上だとそれが3割程度になります。だから350万円位を境にして、その上の人は7割程度の人が結婚しているのですが、それ以下だと7割位の人が結婚していません。それが、結婚線、あるいは結婚ラインと言われる理由

です。

今の日本の社会では、若者の間に格差が広まってきていて、もう若者という共通した層は存在しないのだということを、若者を論ずる社会学者たちが言い出しています。

本当に90年前後の時代はとても大きな変化をもたらしました。そういう時代に、新しい時代の変化を描く社会学がたくさん生まれていくわけです。リキッド・モダニティ論のバウマンとか、ギデンズとかベックとかという人たちです。それから日本でも、心理学化とか、心理化する社会とかいう議論が登場してきます。

時代が変わることによって新しい社会学、新しいものの見方が出てくる。大変な時代ですが、ある意味では社会学をする人間にとってはとても魅力的な時代です。もうそろそろ引退してもいい年齢ですが、でもやはり時代が変わる中で、何かとてもわくわくする気持ちを抱きます。自分が今まで持ってきた枠組みでは説明できなくなってきて、こういう時代を説明するために今度はどういう枠組みが必要になっていくかを考えることはとてもわくわくすることです。あまりでしゃばらないほうがいいのかもしれませんが。

こういう時代を描いた典型的な作品に『リキッド・モダニティ』というバウマンの本があります。バウマンはその中で、グローバル化した社会の特徴として、生産の仕組み、コミュニティ（地域社会）、家族の3つの大きな変化を指摘しています。1つは「フォーディズムからポスト・フォーディズムへ」の変化で、これは、雇用の流動化とか不安定化を意味します。つまり、今までは1つの（大手の）企業に入ったら一貫して定年まで働くという雇用慣行が、これは日本だけではなく欧米社会でも一般的だったのですが、崩れていく。それが、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行のことで。

競争が激しくなって、常に時代の変化に対応していかななくてはならなくなると、もう古い技術を身に付けた人は不要化していくわけです。パソコンは典型的にそのことを示しています。今まで表を書くのに手書きしていたのがエクセルで全部簡単にできるようになる。だから、表をつくるのに熟練していた年配の人が不要になっていくわけです。その結果、雇用が流動化し、不安定化していく。その中で、日本でも格差、つまり、雇用が正規と非正規という雇用形態に分断して格差が生じていきます。グローバル

化の時代に対応していくために日本もそうやってきたのです。

それから、コミュニティも流動化、一時化する。私も、大阪、名古屋、静岡、千葉、今は東京の大学にいますが、この前数えたら、海外を含めて11回引越しました。そのことを友人に話したら、「そんなのまだまだ少ないほうだ」と言われて、「私なんか30回も引越した」と言われました。そういう時代になってきて、生まれたところでずっと育つという時代ではなくなっているわけです。

カーニバル・コミュニティというのは、カーニバル、つまりお祭りや行事のときだけ一体感が盛り上がるようなコミュニティです。そういう意味でカーニバル・コミュニティという言葉はバウマンは使っています。

それから家族も、離婚が増えたり、あるいはシングルが増えたりという形で流動化、一時化していく。現代の家族のことをバウマンは、ホテル家族と呼んでいます。ホテルは一時的に泊まる場所ですよ。だから家族もずっといるところじゃなくて一時的なものになっていくのです。

人生の設計も、かつてはこの会社にずっといるとか、この地域にずっと住んでいる、この結婚相手とずっと一緒に生活するとか、そのように長期的に展望することができたのに対して、今の社会は、特に生産、労働の世界が流動化、一時化することで、それに合わせて、家族や地域も流動的、一時的なものになっていく。そういう現実を断片化する、フラグメント(fragment)ということですが、というようにバウマンは言っています。そういう時代に対応する自己像が、心理化する自己です。

6. 心理化する自己

心理化は一般的に現代的な傾向とされます。その典型的な見方は、心理化はグローバル化やネオリベリズムの進展する1990年前後に端を発するというものです。ここでは3つの側面に心理化を分けています。1つは、たとえば働いていて仕事が上手くできないとか人間関係が上手くいかない、あるいは学校で勉強が集中できないとか、親しい友達ができないとか、そういう問題を心や精神のせいにして、心や精神にそういう問題を帰属して解決していくような傾向です。それが心理化の第1の傾向です。

たとえば、鬱とかADHDの例があります。ADHDには、「注意欠陥・多動性障害」という訳があります。ADはアテンション・ディフィシット(attention deficit)という、注意に欠陥があるということですね。Hはハイ

パーアクティビティ (hyperactivity) のHで、これは多動症とか過度という意味です。ハイパーだから過度に行動してしまう。つまり、従来であれば単に落ち着きがない子供と見なされてきたのが、発達障害を抱える者としてラベル貼りされることで、精神、心のせいに問題が帰属されるわけです。最近では、ADHDは子供だけではなく、大人の発達障害と見なされるようになってきました。

このADHDの薬にリタリンという薬があります。これをADHDに対して治療薬として使っています。アメリカでは、これがもう爆発的に売れて、大手の製薬会社が多大な利益を得ているそうです。鬱に対してはプロザックという薬が普及していますが、ADHDに向精神薬を使うというのは日本ではまだそれほど普及していませんが、いずれアメリカと同様になっていくのではないかと思います。このように、本来社会的な問題であるのに、心や精神のせいにして問題を解決していくというのが第1の意味での心理化です。

第2の意味での心理化は、自己実現の心理化です。それは、自分のアイデンティティだとか自分らしさだとかを求めるときに、心理学的な言説が浸透してきていることを指しています。

自己実現の心理化は、さらに3つに分けられます。1つはスピリチュアリティの心理化です。大ざっぱに言えば、心理学が宗教の代わりに務めるようになってと言ってもいいと思います。たとえば、いろいろ悩みがあって心を癒やしたいとか、それは宗教の1つの機能ですが、それが心理学的な言説に担われるようになる。ジムに時々行くことがあります。ジムにアロマセラピーとかヨガとかいうのがあります。ジムの部屋でハーブとかアロマの匂いが出るようになっていて、それを嗅ぎながらやる。ジムにもそういう癒やしが浸透してきて、そういうものをとおして心が癒やされるという考えや感じ方が浸透していく。従来だったら宗教が癒やしの機能を持っていたのが、今では癒やしが心理学的なものに変わっていくわけです。

自己実現の心理化の2番目は、セラピー的語彙によって自己を解釈し、自己を見いだそうとするケースです。たとえば、トラウマや鬱や多重人格とか、そういう言葉を通して、自分の今の悩みが、トラウマを抱えているせいではないか、あるいは自分がうまく社会に適応できないのは、自分が多少多重人格的な要素を持っているのではないかと、そのように自らを解

積していく。それらの傾向が、セラピー的語彙による自己実現の例です。

自己実現の心理化の3番目は、自己肯定感の神話化です。自分が悩んだり自分の指標を求めたりするときに用いるハウツー的な本があります。そういうものを「自己啓発書」と呼びます。自己啓発書を見ると、従来は社会のために貢献しようとか、社会のために生きようという、言説が多かったのですが、今のはそうではなく、自分の心を見つめようとか、あるいは自分の脳をもっと見つめて、快楽を出すような物質を高める食品を食べようとか、つまり、社会から心や脳に、その焦点が移っていく傾向にあります。

自己実現の心理化は以上のように3つに分類されますが、心理化全般の第3番目の特徴は人間関係の感情意識化です。若者論で「優しい関係」という言葉を聞いたことがあると思います。それは、相手を傷付けないように、相手に配慮しながら、相手の心を、自分を含めて相互に読み会いながら人間関係を築いていく関係です。だから人間関係もやはり心がキーワードになっている。

以上のような傾向を含めて、人間関係を築く上でも、あるいは自分らしさを求めていく上でも、いろいろな社会問題を考える上でも、心や精神が非常に重要視されて、逆に、いろいろな問題を社会の中に位置付けて考えていく傾向がとても弱まってきています。高度経済成長期とかバブル期のように社会が豊かで、問題が起きてもそれが豊かさの背後に隠されていた社会であれば、ある面でそれでもよかったわけかもしれませんが、今のような格差が進んできている社会では、いろいろな社会問題が顕在化してきています。そのような状況の中で、問題を社会的に見ていこうというコンセンサスとか想像力がなくなって、全部それが心や精神の問題に還元されていくと、いろいろな問題を社会的に解決していくことができなくなってしまおうという、そういう危機の状態に今あるのではないかと思ひ、大変危惧しています。

時代が大きく変わること、それぞれの時代に対応した自己のあり方が語られてきたわけですが。その中でも、今の断片化する時代は大きな問題を抱えています。アメリカでのトランプ現象だとか、イギリスでのEU離脱という新しい動きに示されるように、90年代以降から現代までとはまた違う時代がこれから始まって、またそれに対応した自己のあり方が生まれていくのではないかと思います。

今日はこれでお話を終わりにします。どうもありがとうございました。

* 講演内容の出典に関しては、以下の私の著書を参照してください。

- ①『自己と「語り」の社会学』2000年、世界思想社
- ②『自己の発見—社会学史のフロンティア』2011年、世界思想社
- ③『不安定化する自己の社会学』2017年（近刊）、ミネルヴァ書房
（特に③が、今回の講演内容にもっとも近いものです。）

（付記）

本稿は、2016年11月11日に行われた日本大学社会学会特別講演会「戦後日本における3つの自己」の内容をまとめたものです。それゆえ、文中の表現は2016年11月時点のものとなっているので、ご注意ください。